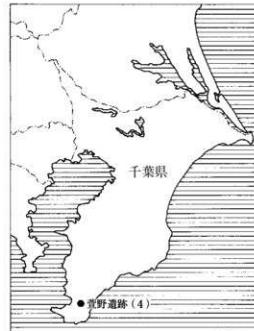


館山市萱野遺跡（4）

—河川基盤整備事業二級河川澁川埋蔵文化財調査報告書—



平成25年2月

千葉県 県土整備部
公益財団法人 千葉県教育振興財団

序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第705集として、千葉県県土整備部安房土木事務所による二級河川滻川の河川基盤整備事業に伴って実施した館山市萱野遺跡（4）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、滻川沿いの河岸段丘上から縄文時代から古墳時代の遺物が出土するなど、この地域の歴史を知るうえで多くの貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際しご指導、ご協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また発掘から整理までご苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年2月

公益財団法人 千葉県教育振興財団

理事長 渡邊清秋

凡　例

- 1 本書は、千葉県県土整備部安房土木事務所による河川基盤整備事業二級河川流域に伴う埋蔵文化財の調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
　　菅野遺跡（4）千葉県館山市山本2457ほか（遺跡コード205-005-4）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県県土整備部安房土木事務所の委託を受け、公益財團法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は以下のとおりである。

調査研究部長	関口達彦	調査2課長	橋本勝雄
発掘調査期間	平成24年9月3日～9月21日		
	調査担当者　主任上席文化財主事　加藤　正信		
整理作業期間	平成24年11月1日～11月30日		
	整理担当者　上席文化財主事　黒沢　崇　　水洗注記～報告書刊行		
- 5 本書の執筆は上席文化財主事 黒沢 崇が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育振興部文化財課、館山市教育委員会、千葉県県土整備部安房土木事務所は多くの方々からご指導、ご協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第1図	館山市発行	1/2,500地形図	昭和55年測量	平成2年修正
第2図	国土地理院発行	1/25,000	地形図「館山」「千倉」「那古」	
- 8 本書で使用した地図の座標値は、第1図が日本測地系、第3図が世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 9 土器の観察表に記載した色調は『新版標準土色帖』に基づいている。
- 10 図版1の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

本文目次

序 文

凡 例

目 次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 事業の経緯と経過.....	1
2 発掘調査・整理作業の方法.....	1
第2節 遺跡の位置と周辺遺跡.....	3
第2章 調査の成果.....	5
第1節 調査区.....	5
第2節 出土遺物.....	5
第3章 まとめ.....	8
抄録.....	卷末

挿図目次

第1図 周辺地形図.....	2	第4図 調査区断面図.....	7
第2図 周辺遺跡の分布.....	4	第5図 出土遺物.....	7
第3図 調査区平面図.....	6	第6図 安房地域の古墳時代関連遺跡.....	9

表 目 次

第1表 遺物観察表.....	8
----------------	---

図版目次

図版1 航空写真

図版2 調査区遠景・表土除去・調査後全景

図版3 調査区調査後全景・確認トレンチ

図版4 調査区断面・調査状況・出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過（第1図）

千葉県土木部では平久里川水系滻川の蛇行が著しく、川幅が10m～15mと狭いため、昭和50年度から河川改修に着手し、県道橋（鶴戸川橋）の架け替えや農業用取水堰の改築等を2級河川滻川総合流域防災事業として行ってきた。全体計画区间3.7kmのうち、1期区间1.9km（平久里川合流点～国分バイパス橋梁部）が平成16年度に完了し、平成17年度から上流部の山名川合流点までの2期区间1.8kmについて改修計画を進めている。その中で館山市国分地区における滻川河川改修事業の開始にあたり、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査結果を踏まえ、事業計画地内には遺跡が所在する旨の回答を行った。そしてこの回答を受け、その取り扱いについて関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、公益財團法人千葉県教育振興財團文化財センターが発掘調査を実施した。

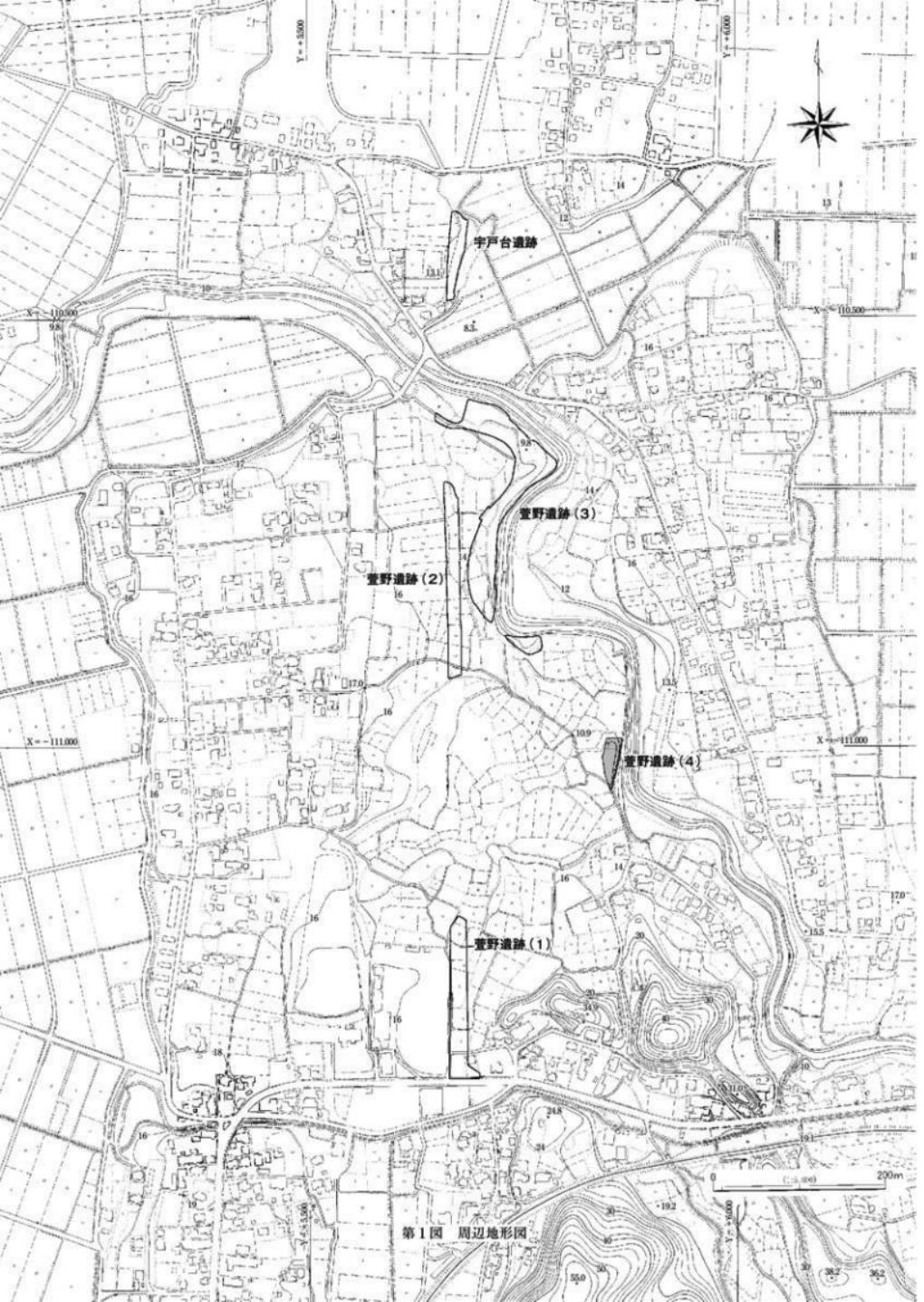
事業対象地の一部については平成20年度に発掘調査を開始し、その部分の整理作業を平成21～23年度に実施、「館山市萱野遺跡（3）」として発掘調査報告書を刊行している。そして今回、事業地の一部の計画が進み、平成24年度に発掘調査が可能となり、「館山市萱野遺跡（4）」として発掘調査報告書刊行の運びとなった。平成24年度に実施した発掘調査の面積は860m²である。そのうちの356m²に対して確認調査を実施し、遺構は検出されなかつたが、縄文時代から古墳時代を主体とする遺物が出土した。

2 発掘調査・整理作業の方法

調査にあたり、調査区全体を覆うように20m×20mの方眼を大グリッドとして設定し、基準は先行して発掘調査を実施した萱野遺跡（3）と同じとした。今回の調査区では北西端が大グリッドで20AD大グリッドに相当する。大グリッドを2m四方に100分割し、北西隅を00、南東隅を99として小グリッドとした。20AD-00小グリッドの世界測地系（座標系X）の座標値はX = -110.620, Y = 5.540である。

確認調査はまず、地形をみながら南北方向にのびるトレチを2本設定した。調査区北側は畑の造成により周辺より1段低くなってしまっており、トレチ確認の結果、地山が削られて平らにされていることが判明し、遺物の出土もみられなかった。調査区南側については木の抜根による搅乱が一部みられたものの遺物が出土した。事業地内の搅乱部分以外には遺構・遺物包含層が遺存する可能性が考えられたため、トレチの南側を拡張してより広い面で確認調査を実施した。なお、下層（旧石器時代）についての確認調査は実施していない。

整理作業は遺物の水洗・注記を行った後、遺物を種別毎に分類してから、接合作業等を行った。遺物は摩滅した小破片であり、ほとんど接合する個体はなく復元作業は生じなかった。実測はすべて手実測、縄文土器と須恵器については拓本を行った。併行して、調査図面・写真の記録整理を進め、トレース、挿図・写真図版作成を行った。写真図版については、発掘作業でデジタルカメラによる遺跡の記録作成を行っていたため、遺物写真も合わせてデジタルカメラで撮影し、デジタル編集により作成した。その後、原稿執筆を行い、編集・校正作業を経て、このたび報告書刊行となった。



第1図 周辺地形図

第2節 遺跡の位置と周辺遺跡¹⁾（第2図）

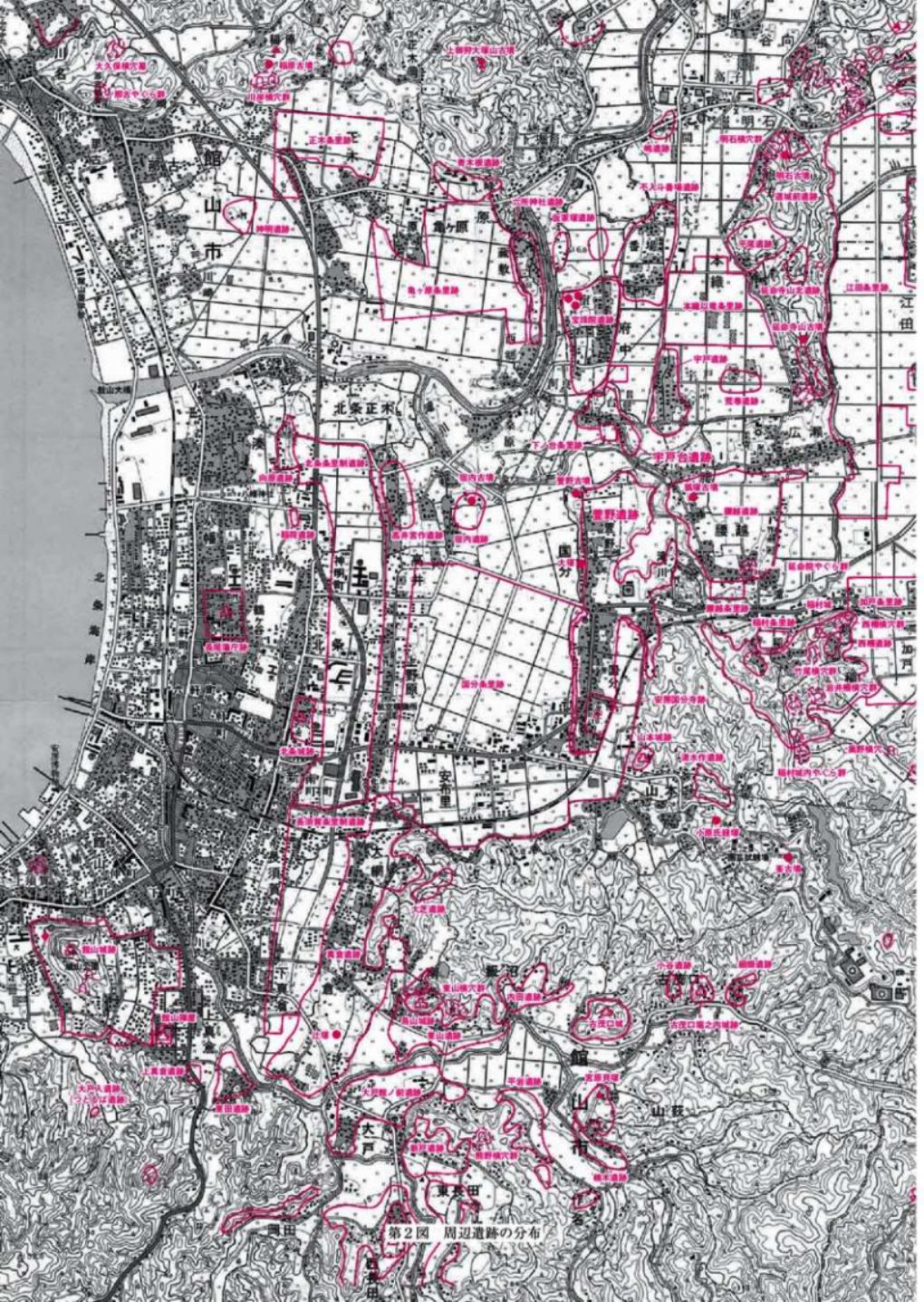
今回調査した萱野遺跡（4）は館山市山本2457ほかに位置する。地形的には平久里川の支流で大きく蛇行して北流する滻川の西岸、標高約15mの河岸段丘上に立地する。滻川の川面までの比高差は10m以上である。調査対象区は滻川に沿って南北に細長く、川側に緩やかに傾斜している。調査前の地目は杉林であり、北側は一段低く現状では畑に利用されていた。また、調査区南西隣接地には木幡神社の神木である樹齢800年前後とされる「滻川のびゃくしん」が隣接し、館山市指定天然記念物として保護されている。

萱野遺跡はこれまでの発掘成果により主に弥生時代中期から中世を中心とする複合遺跡であることが判明している。周辺の遺跡の分布は第2図のとおりで、海岸線に併行する砂丘列・海岸段丘の平坦面や河川の氾濫等により形成された自然堤防上、河川に面する段丘縁辺に多く立地する。縄文時代では出野尾貝塚・鉈切洞穴・大寺山洞穴等に代表される海蝕洞穴遺跡が特徴的である。一方、開地遺跡の調査では遺物の出土はみられるものの集落の具体的な様相が判明しているものはほとんどない。弥生時代では方形周溝墓が仮家塚遺跡をはじめ、近年では萱野遺跡（2）・宇土台遺跡・東田遺跡での検出が続いている。集落としては宝珠院遺跡・萱野遺跡（2）で堅穴住居が複数調査されている。特に、萱野遺跡（2）では環濠とされる2条の溝が併せて検出されており特筆される。古墳時代では、高塚古墳は少なく、横穴の基數が卓越する地域とされてきたが、宝珠院遺跡で墳丘の削平された3基の円墳が検出されたのをはじめ、萱野遺跡（2）・宇土台遺跡では前期に遡る前方後方墳・方墳が新たに発見、調査され、砂丘列に築造されたが埋没してしまった高塚古墳の存在も無視できない状況となってきている。長須賀条里製造跡では古墳時代中期後半の水田に伴う水路から多量の土器・模造品等が出土し、水際祭祀の痕跡と考えられている。東田遺跡で検出された後期の溝状遺構や後期以降の巨大掘立建物跡からも多量の祭祀遺物とともに「粗造土器」といわれる壺形の小型土器が出土し、当地域の古墳時代祭祀の特徴のひとつとして挙げられている。奈良・平安時代では、長須賀条里遺跡で、部分的であるが条里型水田が発掘調査にて明らかにされている。安房国分寺では平成22年に保存目的の調査として第6次調査が実施され、小規模ではあるが、南東の寺域を区画する溝が検出され成果を上げている。中世では、平成24年に南房総市岡本城跡とともに国史跡に指定された里見氏ゆかりの稻村城跡が所在し、防禦性を高めた当時の地形をよく残している。また、当地域は鎌倉幕府との繋がりからやぐらが集中して造営される。近年では保存目的のため千手院やぐら群の詳細な3次元測量調査が実施され、14世紀中頃から造営されるやぐらの変遷と石塔物の詳細な分析が行われている。

このように周辺では、近年の開発に伴う発掘調査や保存目的の調査成果が増加し、具体的な形で資料の充実が図られてきている。

注1 周辺遺跡の内容については主に下記文献を参照した。

- 1988『古代寺院跡（宝珠院）確認調査報告』千葉県教育委員会
- 2004『館山市長須賀条里製造跡・北条条里製造跡』（財）千葉県文化財センター調査報告第474集
- 2006『館山市東田遺跡』（財）千葉県教育振興財團調査報告第551集
- 2010『館山市萱野遺跡・宇土台遺跡』（財）千葉県教育振興財團調査報告第639集
- 2012『館山市萱野遺跡（3）』（財）千葉県教育振興財團調査報告第680集
- 1988『古代寺院跡（宝珠院）確認調査報告』千葉県教育委員会
- 2011『館山市安房国分寺跡第6次調査報告書』館山市教育委員会
- 2008『館山市稻村城跡調査報告書』館山市教育委員会
- 2012『千葉県館山市千手院やぐら群』千葉県教育委員会



第2図 周辺遺跡の分布

第2章 調査の成果

第1節 調査区（第3・4図、図版2～4）

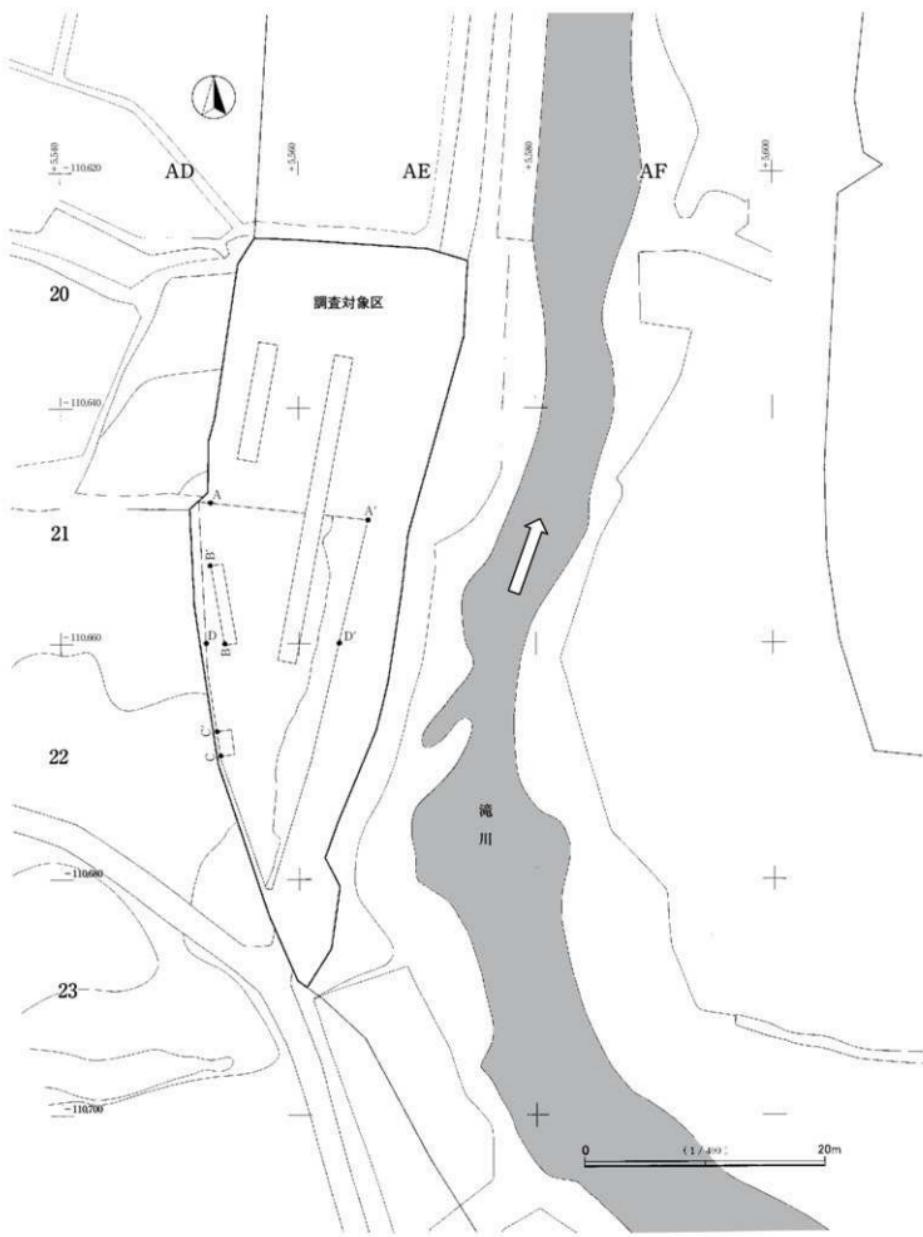
調査対象面積は全体で860m²である。そのうちの南側に当たる部分を主に拡張し、356m²に対して確認調査を実施した。調査の結果、調査地は北側半分が畑の造成により大きく削平され、地山の凝灰岩の岩盤層が部分的に露出している状況が確認された。南側半分は川に向かいやや傾斜するものの比較的平らな部分が遺存しており、遺構が検出される可能性があったが、表土を除去すると杉を抜根した痕跡がひどく、大幅に搅乱されていた。遺物は点在して出土していることから部分的にトレンチ状に深掘りしながら調査区の土層堆積を確認しながら精査したが、遺構を検出することはできなかった。

南側調査区には第1層の黒褐色層がほぼ全面に堆積する。抜根による搅乱層ではあるが、本来の遺物包含層が現表土や地山層と混じり合った形となったものと考えられる。第2・3層は地山と捉えられ、第3層には岩盤層が露出する部分があり一定しない。遺物は土器小破片がほとんどで、出土は第1層に限られる。分布に偏りではなく、確認調査トレンチ状拡張区内全体から出土した。

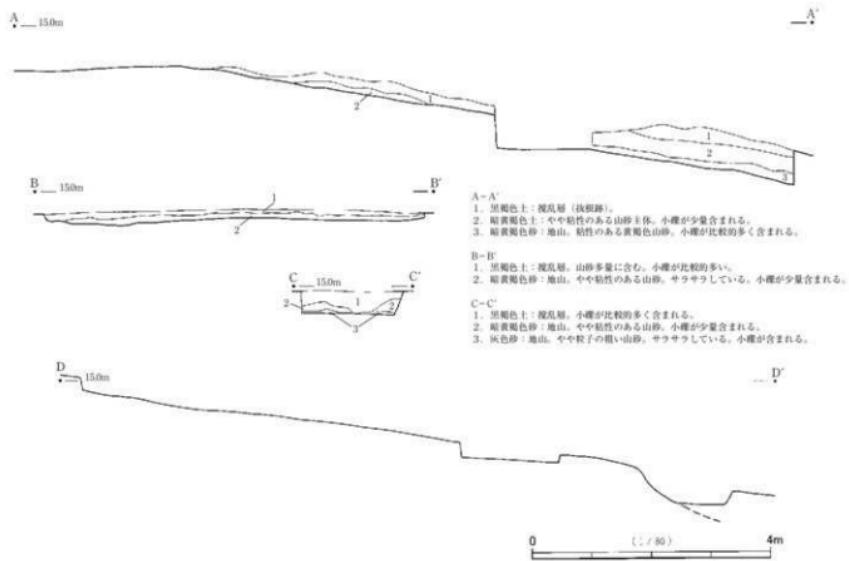
第2節 出土遺物（第5図、第1表、図版4）

出土遺物は、黒曜石の石器（剥片）4点のはかは土器片であった。土器の内訳は縄文土器2点、土師器130点、須恵器1点である。土師器片は古墳時代の所産のものが主体と考えられるが、一部に弥生土器や薄い破片の中に奈良時代以降の土器が含まれている可能性があるが、小破片であり明確に分類できない。ロクロ整形の坏破片は出土していない。土器片は微砂粒が多く含まれるもの、赤彩されている薄手の破片が多い。白みを帯びた色調の胎土の破片が2点出土しており、明らかに在地産のものとは異なる。他に、近世の鉄袖灯明皿、灰釉磁器、火鉢破片や錢貨（寛永通宝）1点も出土した。

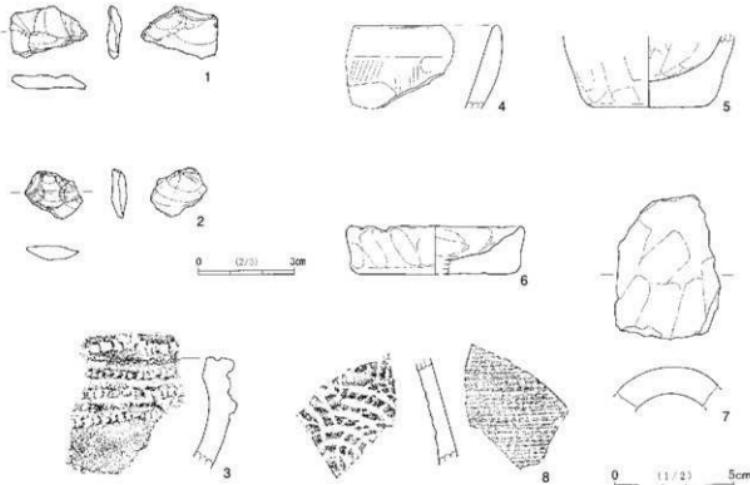
1・2は黒曜石の剥片である。1はやや黒味が強く透明度のない色調で、側面に微細な剥離痕がみられる。2は透明度が高く、下端部が急角度に剥離している。恐らく縄文時代の所産と考えられる。3は縄文土器でキャリバー形の深鉢口縁部破片である。色調は黒みを帯び、胎土には少量の雲母粒が含まれる。平縁の口唇上端部と口縁部文様帶の隆線に沿って横位の押引文が施される。口縁上端と内面が平らに整形される。中期阿玉台式土器の古相の時期と考えられる。ほかに縄文土器は1点で、無文土器片であるが胎土・焼成が3と近似しており同時期の深鉢胴部破片であろう。4は土師器塊の口縁部破片である。体部上部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。胎土には微砂粒が多く含まれる。焼成はやや不良で、器面や断面はとろけるように摩滅気味である。口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ後ナデ調整である。やや赤みを帯びる色調である。5は土師器の底部破片である。内面調整はやや雑で、色調は黒みを帯びる。焼成は良好で、硬質である。弥生土器の底部の可能性もあるが断定できない。6はいわゆる「粗造土器」破片である。小型の坏形で、ユビでつまみ上げるように体部から口縁部を成形するため、内外面にユビナデ痕が明瞭に残される。色調はやや赤みを帯び、胎土には比較的大きめの砂粒が含まれる。底面は平らで、木葉痕がみられる。7は土師器高杯の脚部破片と考えられる。焼成は良好で、ナデ調整が施される。器面が灰色を呈する部分もあり、羽口として転用された可能性もある。8は須恵器破片である。甕の体部上半、肩部の破片の可能性がある。やや暗い色調で、外面にカキ目状の筋、内面に同心円文の当て具痕がみられる。



第3図 調査区平面図



第4図 調査区断面図



第5図 出土遺物

第3章　まとめ

今回は河川改修工事に伴う川に隣接する860mという狭い範囲の発掘調査であった。調査地は遺跡全体としてみれば東側の縁辺部にあたり、確認調査で北側が畠の造成により大きく削平され、南側半分も杉林の抜根作業により広く搅乱されたことが判明し、遺構を検出することはできなかった。主な遺物としては縄文時代中期の土器・剝片と古墳時代と考えられる土器片が出土し、本来はこの周辺に概期の遺構や集落の痕跡があったものと考えられる。

出土遺物で主体となるのは古墳時代土師器片であるが、その中にいわゆる「粗造土器」が含まれていることに注意したい。破片資料ではあるが、前述したとおり安房地域特有の祭祀遺物のひとつである。川の隣接地出土ということもあり、原位置ではないものの川辺の祭祀が周辺で行われていたことを強く示唆するものである。安房地域の古墳時代の関連遺跡の分布をまとめたのが第6図¹⁾である。本地域では古墳や集落の調査例が極めて少なかったが、今回の河川改修や富津館山線の工事に伴う調査により古墳や集落の具体的な様相が判明してきている。今後は、安房地域の古墳時代像を描くうえで今回の成果も併せ、遺物と古墳・横穴の分布も総合的に捉え直して研究していく必要がある。

注1　遺跡の分布については下記文献を参照して作成した。

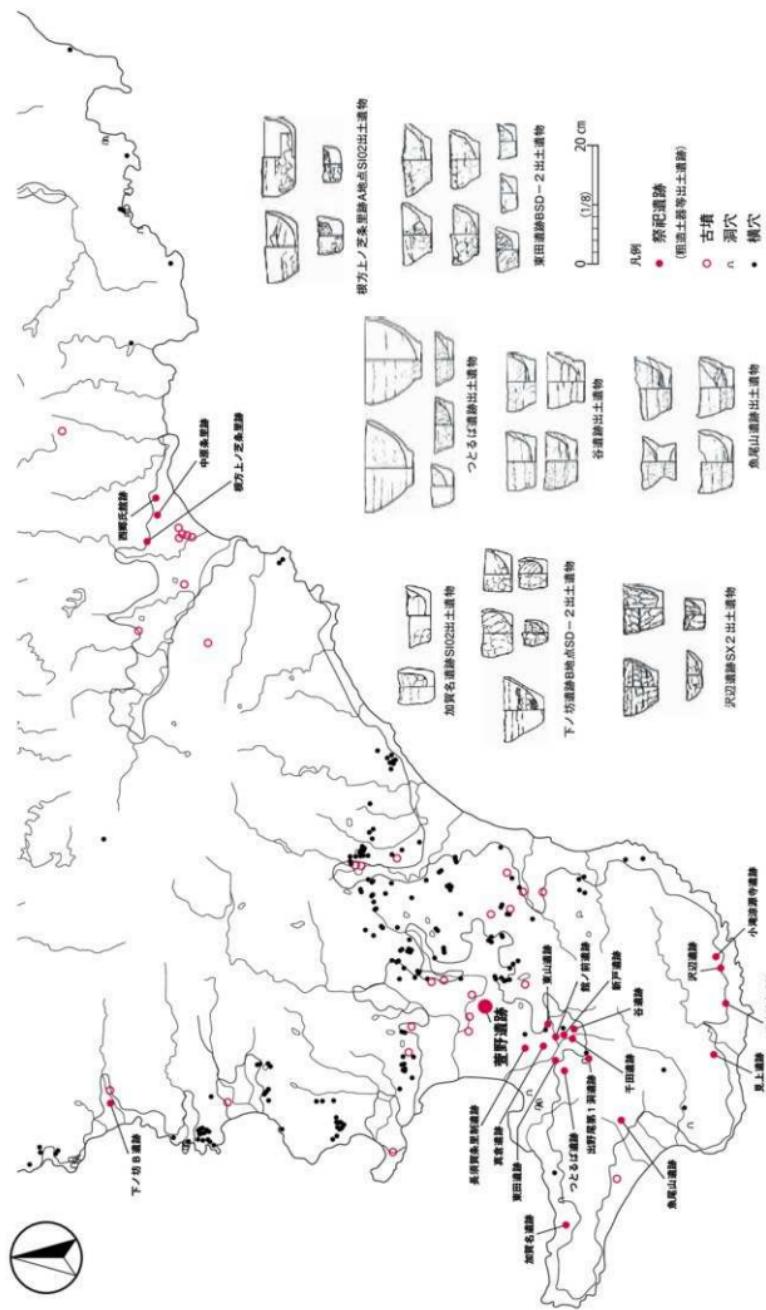
1990『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会

2003『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会

2003『千葉県の歴史』資料編 考古2（弥生・古墳時代）

第1表　遺物観察表

No	遺物No	遺物No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	石材	色調		重 量 (g)	() 検定	() 現在長	備 考
								内面	外面				
1 調査区一括	0001	石器	剥片	長さ 幅	1.7 2.45	破片	黒曜石	黒み強い		1.75			
				厚さ	0.5								
				長さ 幅	1.5 1.8								
2 調査区一括	0001	石器	剥片	厚さ	0.5	破片	黒曜石	透明度高		1.00			
				厚さ	0.5								
No	遺物No	遺物No	種類	器種	法量 (cm)	遺存度	胎 土	色調・焼成		性 法	備 考		
3 調査区一括	0001	圓文土器	深杯	11件 底径 器高	— — (4.5)	口縁部 破片	雲母粒微量	内面	2.5Y5/4黄褐色	内面	ナデ、ミガキ		
								外 面		外 面	隆岱、押引文		
								燒成	やや不良	底外 面	—		
4 調査区一括	0001	土師器	埴	11件 底径 器高	— — 3.5	口縁部 破片	砂粒多量	内面	7.5YR6/6橙色	内面	ヨコナデ、ナデ		
								外 面		外 面	ヨコナデ、ハケメ状		
								燒成	やや不良	底外 面	—		
5 調査区一括	0001	土師器 (弥生?)	甕?	11件 底径 器高	— 5.0 3.0	底部 破片	微砂粒微量	内面	10YR4/1褐灰色	内面	ナデ	底面黒度、 内面黒色	
								外 面	7.5YR6/4にぶい褐色	外 面	ヘラケズリ、ナデ		
								燒成	良好	底外 面	ハラケズリ		
6 調査区一括	0001	粗造土器	环形	11件 底径 器高	— (6.6) 2.0	25%	砂粒含	内面	5YR6/6橙色	内面	ユビナデ		
								外 面		外 面	ユビナデ		
								燒成	良好	底外 面	木葉痕		
7 調査区一括	0001	土師器	高杯	11件 底径 器高	— — (6.0)	脚部 破片	黑色微砂粒合	内面	2.5Y5/3にぶい黄色	内面	ナデ	羽口利用か?	
								外 面		外 面	ナデ		
								燒成	良好	底外 面	—		
8 調査区一括	0001	須恵器	裏	11件 底径 器高	— — (4.6)	脚部 破片	白色微砂粒微量	内面	10Y5/1灰色	内面	同心円当て具痕		
								外 面		外 面	カキメ		
								燒成	良好	底外 面	—		



第6図 安房地城の古墳時代関連遺跡

写 真 図 版

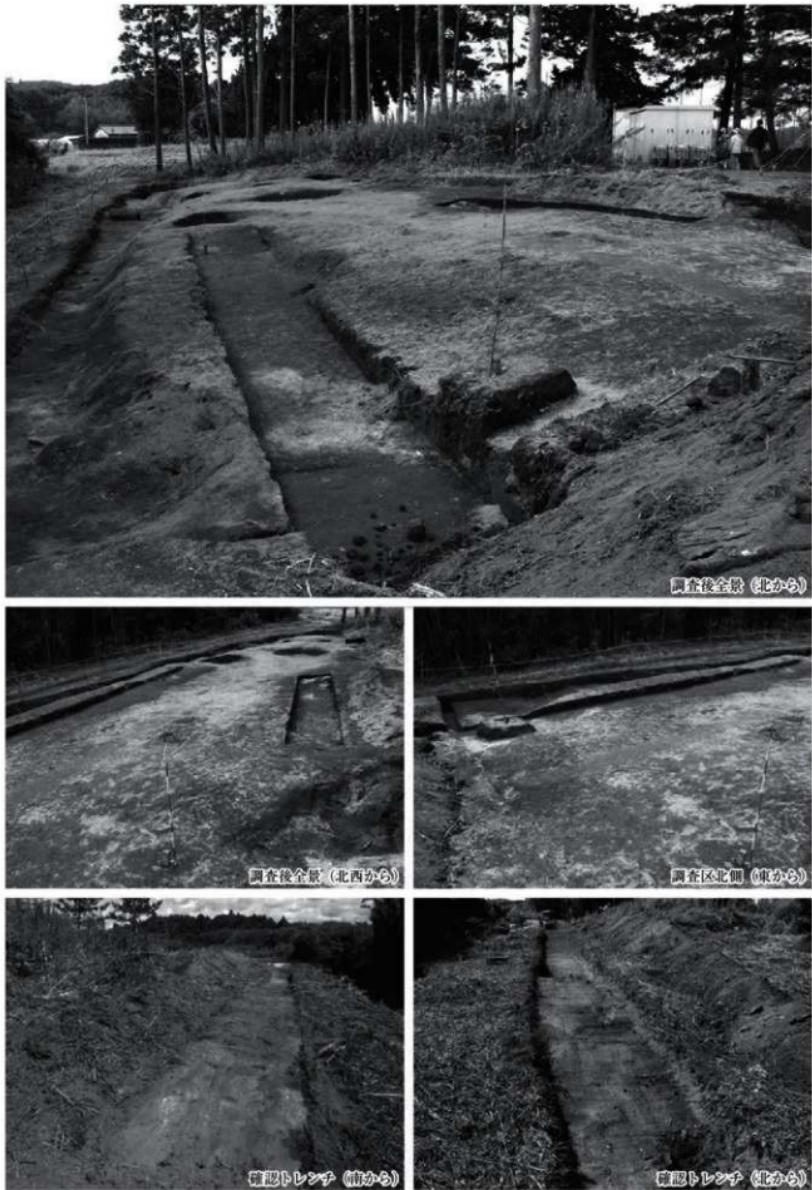


董野遺跡(4)

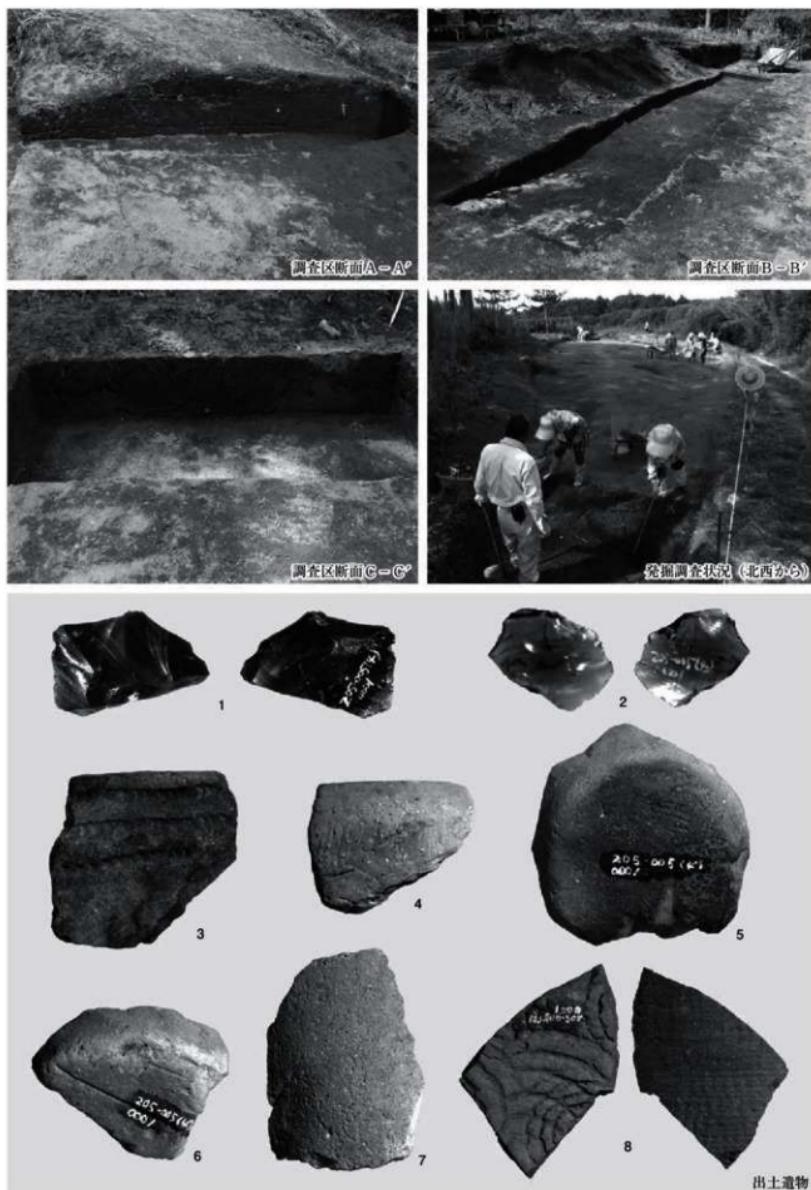
航空写真



調査区遠景・表土除去・調査後全景



調査区調査後全景・確認トレンチ



調査区断面・調査状況・出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たてやましかやのいせき（4）							
書名	館山市 荘野遺跡（4）							
副書名	河川基盤整備事業二級河川流域埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第705集							
編著者名	黒沢崇							
編集機関	公益財團法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL043-424-4848							
発行年月日	西暦2013年2月28日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
荘野遺跡（4）	館山市山本 2457番地ほか	12205	005-3	35度 00分 7秒	139度 89分 40秒	20120903～ 20120921	860m ²	河川基盤整備
					世界測地系			
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
荘野遺跡（4）	包蔵地	縄文～古墳時代	包含層	縄文時代土器・石器 古墳時代土師器・須恵器				
要約	荘野遺跡（4）は流域段丘上に位置し、確認調査の結果、縄文時代中期土器・黒曜石の剝片や古墳時代の土器類が出土した。擾乱により明確な遺構は検出されなかったが、先に調査が実施された荘野遺跡（2）（3）で明らかにされた古墳時代集落との関連が考えられる。古墳時代の遺物の中に祭祀に使用されたと考えられる环形の粗造土器が含まれ、川辺の祭祀が周辺で行われていた可能性が指摘できる。							

千葉県教育振興財団調査報告第705集
館山市萱野遺跡（4）
— 河川基盤整備事業二級河川流域埋蔵文化財調査報告書 —

平成25年2月28日発行

編 集 公益財團法人 千葉県教育振興財団
発 行 千葉県県土整備部
千葉市中央区市場町1-1

公益財團法人 千葉県教育振興財団
四街道市施渡809番地の2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町1-10-6
